



オレグ・グセフ Oleg Gusev

 Russia

●2007年3月岡山大学院自然科学研究科にて博士号取得。その後、JSPSフェローを経て、2009年9月から農業生物資源研究所のリサーチフェローとなり、現在に至る。
2010年、COSPAR科学会会（ドイツ・ブレーメン）にてZeldovich Medalを授与された。

日本での10年間 — ギブ&テイクの精神で

私が「在留科学者」として日本に住み始めて、もう10年になります。この国で私は生物学者として成長すると同時に、日々の暮らしや人々や自然との出会いから多くのことを学んできました。

幾多の素晴らしい体験

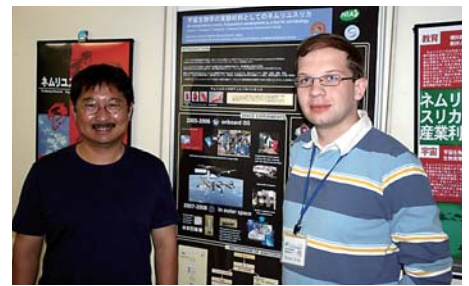
初来日から数年間は胸がときめくような発見と驚きに満ちた日々でした。例えばごみの分別、万事が時間通りに運ぶこと、優れたインフラ、そして僻地に住む人々へのよく考えられたサポートをはじめとする大小様々な事に遭遇してきたこの日本は、私にとってまるで人生を学ぶ学校のような存在になりました。私は旅が大好きで日本国内の様々な場所を訪れていますが、どんな小さな村にもその土地の長い歴史や郷土土産、または独自の行事があることにいつも驚かされます。多くの場合、私たちが外国に対し抱くイメージというものはひどく単純で、よく知られたいくつかのキーワードで表される程度のもので、私も来日するまでは日本のことを「ロボット、先端電子機器、アニメ、漫画」の国だと考えていました。しかし実際に住んでみると大違いでした！最近沖縄の島々を訪ねた時はタコ漁に驚嘆し、また九州ではみかん農家の人たちとの会話を楽しみました。東北ではこけしの作り方を教えてもらいました。日本には実に多くの顔があるのです。そして地元の人たちとの交流を通じてもっと日本を知りたいと考え、独学で日本語を学習したのですが、今のところそれが大いに役立っています。

日本がくれた多様な機会

私はある海棲無脊椎動物について研究したいと思い日本に来たのですが、なんと私が所属した大学はその研究ができる日本唯一の場所でした。

しかも驚いたことに、やがてさらに素晴らしい機会に恵まれました。私たち留学生は、地元の祭りや日本人家庭で

のホームステイ、さらには様々な国の学生が集うフォーラムやコンテスト等の多様な文化プログラムに頻繁に招かれ



▲執筆者（右）と指導教官、奥田隆博士（つくば市農業生物資源研究所（NIAS）にて）

たのです。また私は教えることにも興味を持っていますが、専門とする生物学の研究に加えて、地域社会への先端科学の紹介を目的とした県主催の公開講演その他のイベントにも定期的に参加しました。

またいくつかの学校でサイエンスキャンプのプログラムに参加させていただきましたが、日本人の先生や生徒たちと交流し、私の研究テーマや出身国を知ってもらい、そして様々な魅惑的な経験を分かち合うことができたのは大変嬉しいことでした。

日本政府の様々なサポート

私は2001年に文部科学省の奨学金制度で来日し、その後何年も日本政府から様々な形での支援を受けながら教育／研究活動に従事してきました。ロシアの大学を卒業後、幸運にも奨学金を受けることができましたので、岡山大学の大学院に入学しました。他の多くの国にも研究・教育のためのフェローシップ制度はありますが、日本の場合は他とは異なり、素晴らしい仕事環境で研究に従事する機会を与えられるだけでなく、日常生活や文化生活においても多くのサポートをいただきました。日本の国際プログラムの優れた点は、海外から来た学生や研究者が、日本語学習支援（所属大学が提供します）や文化講座、他にも特別な保険や安価で快適な下宿等の充実した日常生活上のサポートを受けられることです。また日本に慣れない外国人が早く適

応できるよう手助けしてくれるボランティア団体に所属する人の多さにも感銘をうけました。

残念ながら、日本の学術機関への外国人の恒久的な融合については、まだまだ改善の余地があります。その一方で、海外の研究者を対象としたフォローシップは増加傾向にあり、研究者としてのキャリアをスタートしたい外国人にとって日本は魅力的な国と言えます。また最近採用された新制度により、外国人研究者が科学研究費補助金（科研費）を英語で申請できるようになりました。在留外国人研究者にとって、これは大きな励みになると思います。

2007年に私は幸運にも現在の指導教官、奥田隆博士と出会うことができました。奥田さんは、完全乾燥に対する耐性を持つ極めて興味深い昆虫を研究しておられます。そして生物学者としてのキャリアを追求したいという私の希望を再び日本政府が後押ししてくれる出来事がありました。日本学術振興会（JSPS）の外国人特別研究員事業、ポストドクトラルフェローシップを獲得したのです。このフェローシップのおかげで、放射線耐性の研究や国際宇宙ステーションでの実験における乾燥耐性昆虫「ネムリユスリカ」の利用という、新たな興味深い研究テーマに取り組むことができました。

日本への恩返し：何ができるか？

日本で長年暮らしてきた私は、今こそ日本の人々から学んだホスピタリティを発揮し、人生の大きな一部を占める存在となったこの国に貢献すべき時だと考えています。



▲JSPSの「サイエンスダイアログ」プログラムでの指導風景



▲いわき市にてボランティアのグループと共に

2007年以降は、JSPSならびにロシア研究支援局に我々の研究を評価していただき、日ロ宇宙生物学研究グループの設立に対する追加支援を受けました。現在は国際宇宙ステーションと宇宙空間内の両方でロシアの宇宙飛行士の助けを借りながら複数の研究が進行中です。日本人研究者がロシアの学術機関と協力する機会が増えており、その手助けができることを私は嬉しく思っています。一例をあげると、今年から私の所属する日ロ共同研究チームは、冬眠中の生物を火星に送り、それから地球に戻して地球型生物が惑星間の飛行に耐えられるかどうかを調べる研究に参加しています。このプロジェクトは両国間の科学者協力の好例であり、そしてプロジェクトの成否のカギを握るのは日本とロシア両国のグループの相互支援体制です。さらにこれからの数年間、宇宙航空研究開発機構（JAXA）とロシアや欧州の宇宙機関が協力するさらにエキサイティングな共同プロジェクトも期待されます。

光栄なことに、JSPSの「サイエンスダイアログ」プログラムにも参加させていただきました。教えることは好きですから、日本でトップクラスの高校の生徒たちに私たちの現在そして今後予定される研究を紹介できたのは喜ばしいことでした。訪問した高校とは現在も連絡をとっており、中高生や小学生のための日ロ合同宇宙生命科学教育プログラムを積極的に推進しているところです。

東日本大震災によって日本の広い地域が壊滅的な打撃を受けました。惨状を見て痛感したのは、東北の人たちが快適な生活を取り戻せるように何としてでも復興を支援しなくてはならないということです。そこで福島の人々を支援する日本人ボランティア団体に私も加わり、最近では週末は車づくばから福島に向かい、地震と津波の被害を受けたいわき市の人々への支援活動を行っています。地元の方々は最初は私を見てびっくりしますが、打ち解けるまで時間はかかりません。このつくばから来た外国人に彼らが友好的で親切に接してくれることに感激しています。日本という第二の母国のために行動できるというのはめったにない機会であり、貴重な経験だと感じています。

編集後記

東日本大震災から半年が経ちます。一向に進まない復興に加えて豪雨や台風の被害が私たちの国に追い打ちをかけるかのように次々と襲ってきました。そんな中で、淡々と事態を受け入れているかに見える被災者の方々。世界から称賛された日本人の国民性もこんなにも度々襲う自然災害がもたらしたものだとしたら…。

(O.M)



(社)科学技術国際交流センター会報

AUTUMN '11 平成23年10月1日発行【季刊】

発行責任者

社団法人 科学技術国際交流センター管理部

〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館ビル5F

TEL. 03-3818-0730 (代) FAX. 03-3818-0750

●本誌に関するお問い合わせは、当センター管理部までお願いします。

なお、本誌に掲載した論文等で、意見にあたる部分は、筆者の個人的意見であることをお断りします。